

会報

NO.20

令和5年9月1日発行
 特定非営利活動法人なごや
 歴史まちづくりの会事務局
 名古屋市東区槿木町3-58
contact@758rekimachi.net

『事業報告』

「スキルアップ講座聖マルコ教会 「スキルアップ講座」の開催

六月十七日(土)、歴まちびと・歴まちサポーターのための「スキルアップ講座」として、名古屋聖マルコ教会の現場見学会が行われ、十四名の方と公社の担当の方が参加しました。講師は山田美紀子さん。歴まちびととして派遣され、教会の皆さんを根気強く説得し紆余曲折を経て保存のための耐震工事にこぎつけたという、歴まちびととして誇れる事例だと思えます。

以下、講座内容をわかりやすく山田美紀子さんよりご報告していただきます。
 (松井明子)

名古屋城から徳川園までの界限には、江戸時代から明治、大正、昭和へと名古屋の近代化を伝える建造物が多く残っています。このエリアは『文化のみち』と呼ばれ、一年を通して観光客が訪れ、季節ごとにイベントが開催されたりして、人々にとても親しまれて

います。

文化のみちの中心部である白壁・主税・槿木町並み保存地区から、国道四一号线を挟んで西側に位置している場所に由緒正しい木造教会があります。これが日本聖公会名古屋聖マルコ教会(以下「聖マルコ教会」と称する)です。カナダ聖公会のマーガレット・ヤング宣教師が一八九九(明治三二年)に立ち上げた名門の柳城幼稚園と隣接しています。

私が今回、聖マルコ教会の耐震改修計画を担当させていただくことになったのは、『なごや歴まちびと(名古屋歴史的建造物保存活用推進員の愛称)』として仲間と共に派遣され、聖堂の耐震についてご相談を受けたことが始まりでした。私たちは、歴史ある建物の耐震補強や修復についての専門知識を持った建築士です。ご相談を受けた際に、耐震補強には高額な費用がかかりそうなので、建替え(新築)や減築をご検討されている事をお聞きし、聖マルコ教会の皆さまが状況を正しく理解した上で、今後、聖堂をどのようになりたいのか判断することが大切なのではと強く感じました。また、改修工事について正しく理解されないまま、貴重な教会の建物が失われていくことは、私たちにあって耐え難いことでした。

『なごや歴まちびと』として劣化箇所を指摘と、①耐震診断を受けて現状の評点を知ること。②耐震補強設計をもとに見積書を出すこと。をご提案させていただきました。耐震改修の費用は、補強プランを作成し、プランに基

づいた見積書を出すことで把握できます。

しかし、ご提案したからといって、すぐに耐震診断へ・・・とはなりません。木造住宅以外の建物には診断費用が必要になるからです。耐震診断は派遣業務には入っていません。派遣報告後しばらくして、聖マルコ教会のご担当者様より「次回の信徒総会で聖堂を新築するか、減築するか決めることになりました。」とご連絡をいただきました。耐震改修は具体的なプランが無く、見積書も無いため総会の土俵に上がることができません。

私は、聖マルコ教会と文化のみちについてより深く考えました。今までに注目をされたことは少ないかもしれませんが、文化のみちには、カトリック主税町教会(カトリック)、日本聖公会名古屋聖マルコ教会(中道・カトリック)とプロテスタントの懸け橋となる教会)、日本福音ルーテル復活教会(プロテスタント・ルーテル派)という、世界的に伝統がある三つの教会(教派)が存在しています。キリスト教会には教派があり、その違いによって建物にも特徴が表れています。このことを実際の建物を巡りながら学べば、歴史ある教会建築の知識を身につける教材となります。伝統あるキリスト教会の正しい姿を多くの方々に観ていただくことは、教会と関わる皆様にとっても大切なことだと思います。

どう考えてみても、聖マルコ教会聖堂は文化のみちに必要な建物だと思いに至りました。費用のことはさておき、速攻で補強プランを作成、なごや歴ま

ちびとの仲間である建設会社さんへ見積書を作成していただいて教会へご提示したところ、何とか総会で行われるプレゼンへ参加することができました。工事費では第二位。最安値から一〇〇〇万円程の差がありました。が、お伝えしたい内容は全てプレゼンへ込めて結果を待ちました。後日、「耐震改修をして聖堂を使い続けていくことに決定した。」とご連絡をいただきました。聖マルコ教会の皆様も建物に愛着があり、地域にとっても大切な教会建築であることをご理解いただくことが分かりました。今もなお、教会の皆様へ感謝の思いが溢れています。

ここで聖マルコ教会の建物の特徴・魅力をあらためて記すことにします



名古屋聖マルコ教会 建物概要

竣工：1956(昭和31)年
 構造：木造2階建
 屋根：金属板葺(竣工当初時は瓦葺)
 外壁：モルタル塗りシン仕上げ
 設計：大野信雄一級建築士(教会員)

名古屋聖マルコ教会はゴシック様式の木造教会です。ゴシック様式は一二世紀から一五世紀にかけて教会堂を中心に全ヨーロッパへ広がった建築様式で、一九世紀に再流行した影

響により、日本では明治期の教会建築へよく用いられました

【ブランク四葉形（くり抜き四つ葉飾り）】

葉状装飾はフォイルと呼ばれ、初期イングランド・ゴシック様式を色濃く反映しています。クローバーのくり抜き飾りは、ゴシック建築によく用いられており、葉の枚数により意味合いがあります。四葉形（四つ葉飾り）は、4つの福音書（マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ）を象徴するものと考えられ、三葉形（三つ葉飾り）は、三位一体なる神を象徴するものと考えられています。

引違窓に尖塔形のレリーフとブランク四葉形を組み合わせて、トレサリー（窓装飾の名称）を設えています。比較的シンプルなデザインですが、これはゴシック建築を代表する特徴の一つです。

【ハンマービームトラス】

構造についての特徴は、天井が張ってあり一部分しか見ることにはできませんが、ハンマービームトラスを使用している点です。ハンマービームは、ホール建築や教区教会堂を中心にイギリスで好まれて用いられた屋根架構の様式です。明治初期に持ち込まれた洋建築の構法は、日本の大工により和の技術を工夫して建築されることがありました。聖マルコ教会のトラスも同様の工夫が見受けられます。

フレームについてもイングランドのボックス・フレーム構法を思わせる方法がとられています。日本の在来軸組工法では三尺（約

90cm）ピッチで柱を立てることが基本となりますが、聖マルコ教会では九尺（約2.73m）ごとに柱を立てています。ボックス・フレーム構法では六フット（約1.8m）から二十フット（約6m）の間隔で柱を立てるため、洋建築の構法を意識して建築しているのではと思われまます。

【ハードボードの腰壁と家具】

ハードボードはファイバーボードの一種です。一八九八（明治三二）年、英国において木材の繊維をバラバラに解離し、これを原料とした硬質のボードが世界で初めて工業的に生産されました。第二次世界大戦後には世界的な木材資源の不足により、木材工場の残廃材を原料とした製品が飛躍的な発展を遂げ、当時の日本では外国プラントの輸入によるものが製造されており、羽目板、天井板、床板、家具、建具、キャビネット等に使用されました。聖マルコ教会には、建築当初一九五六（昭和三二）年時の状況を伝える貴重な要素としてハードボードの腰壁と家具が現在も残っています。二〇一八（平成三〇）年に歴史ある教会建築巡りツアーを実施した際には、聖マルコ教会の腰壁を愛おしく観察する参加者の姿もありました。

今回の耐震改修工事では、すでにある魅力的な部分をできる限り残し、構造用合板や筋かい等木質材料を用いて補強を行います。土台、柱、梁の接合部で大きな引抜き力がかかる所には、柱頭柱脚金物を用いて各部材が外れないように緊結し、評点1.0（大地震時に一応倒壊しない）を満たす建物に

します。

改修後の活用については、今まで通りに毎週礼拝を守り続けることに加え、地域で行われるイベントへ積極的に参加します。『なごや歴まちびと』としては地元で活躍されているガイドボランティアの皆様とご協力をして、明治時代を迎え、西洋文化が浸透していく過程で、名古屋の産業の発展とキリスト教会の成長は接点があるのではと思います、現在調査中です。発見があれば、教会建築巡りツアーで発表したいと思えます。（山田美紀子）



講座の中で、聖マルコ教会の牧師である丁胤植先生より聖公会がイギリス発祥のキリスト教会であること、その歴史と歩みについて、丁寧にお話いただきました。ご協力に深く感謝申し上げます。



『会員紹介』

荒木 衛(あらい き) まもる
理事

事務局員(事業担当)

NPOなどや歴まちの会にて、今年度事務局に参加しております、荒木と申します。経歴は、建物の設計を40年ほど行ってきました。現在は建設コンサルタント会社の契約社員で、建築の設計と監理に係る仕事等を行っております。

個人的な理由ですが、年に2回ほど、横浜を訪れます。その際に馬車道から日本大通周辺を歩き近代建築を見て回ることが好きです。街路樹と様式建築やアールデコ風の建築が複数立ち並ぶそのエリアを散策すると、歴史的建物の街並みの端正な美しさに酔いしれます。これは一棟の建物では決して感じることでできない街並みに対する感動です。やはり建物は、その建っている場所と環境によって成立するべき存在だと思います。



横浜の建物

歴史的建造物に係る仕事としては、一昨年、旧料亭稲本の門の復原設計を行いました。これは工作舎中村氏の仕

事でありますが、当社が愛知県から設計と監理を受けて実施しております。伊藤平左エ門事務所の望月氏と構造設計は滋賀の川端建築設計に協力をお願いして行いました。すでに解体されていた材料の調査、そして仮組を行い、使える材料の選別の上実施設計を行い、構造計算とその適合性判定、積算、現場監理業務まで行いました。瓦は古い織部瓦と復原した織部瓦を混合して既存の屋根を再現しました。現在ジブリパークの中の一画に建っております。

今後は、名古屋市の歴史的建造物を活用した景観形成等に、多少なりとも貢献できればと考えております。

山口 ゆずみ(やまぐち ゆずみ)
事務局員(広報 会報担当)

一昨年のコロナ禍に、「あいちのたても」の博覧会2021で母校の金城学院高等学校にある国登録有形文化財の『栄光館』を建物解説しました。卒業後に母校の歴史を改めて調べたり、新しく建て替えられた校舎に訪れたりして、高校生時代にタイムスリップしたかのワクワクした体験が生まれました。文化財の栄光館を毎日のルーティンで使い、このすばらしい空間で三年間を過ごせたことは、今の私にとってかけがえのない財産です。また、在校中に登ったことのない屋上で撮影したりして新たな発見をして、貴重な機会をいただきました。そして、良い思い出

が生まれました。動画公開のため、今もYouTubeで見ることが出来ます。



栄光館

名古屋市長区有松での活動は、NPOを立ち上げるまでに一年間、毎月会議を地元の方と開催しました。その翌年に、有松が重要伝統的建造物群保存地区に選定されることを知らずに関わりましたので、NPOとして活動することで色々な経験をさせて頂きました。その一つである『なごや歴史的建造物保存活用工事助成』では、保存だけでなく、クラウドファンディングでの資金調達も行いました。たくさんの方々にご支援を頂き、心から感謝致しております。工事中に「弘化三年」と書かれている床の間の畳の裏板を発見して、有松で二番目に古い建物だと知り、気持ち引き締まった事を今でも忘れられません。その後、日本遺産に認定された有松で、色々な手段で保存活用の活動をしています。

東海道一の美しい町並みと言われている有松を、次世代に繋げていく為に、地元の皆様と一丸となって活動していきたいです。

『事務局だより』

「歴まちびとの相互認証と養成講座プロジェクトチームについて」

現在歴まちびとへの相談件数が増えているのに対応していくため次期歴まちびと養成講座を早期に開催したいが、四期開催の際応募が少なく苦労したという事を名古屋まちづくり公社からお聞きしています。一方、原眞佐実理事たちのご尽力によりあいちヘリテージ協議会と日本建築家協会修復塾、なごや歴まちびとの三者間で相互認証ができることになり、例えばヘリテージの有資格者は歴まちびと養成講座のうち重複する部分を免除されるので、応募者が増えることが期待されます。

そこで今年度、名古屋市と公社、歴史まちづくりの会でプロジェクトチームをつくり、次期歴まちびと養成講座に必要なプログラムの検証をしつつ、重複部分の洗出しをすることになりました。会からは、加藤理事長、原理事、澤村理事、松井事務局長が参加します。

会員の皆さまには、次期養成講座内容についてのご意見、養成講座開催・運営についてのご意見など、メールで事務局までお寄せいただければプロジェクトチームの中で生かしていけると思います。よろしくお願ひします。(事務局 松井明子)

